

渡辺浩著『近世日本社会と宋学』

徳川時代思想史の主潮流である儒教（学）をどう位置づけるかに
ついては、日本の「近代化」の特殊性の認識の如何に直結し、高度
に論争的な課題となり、今日に至っている。

それは、例えば福沢諭吉、津田左右吉、丸山真男、尾藤正英な
ど、この分野にかかわる代表的論者の基本的論点を想起すれば十分
である。本書は、論文集としては「小振り」ながら、その「総括
的」視野、史料の博搜、論証の緻密・鋭利さからみて、この論争史
に一石を投じたことは確実であり、その波紋の強度・持続性もかな
りのものがあると思われる。

評者はこの書の出版直後、本書が関連分野の研究者にどのように
受けとめられるか、いささかの個人的関心を持ったが、自分自身が
短文ながら「書評」を物すこととなった。周到・犀利な書だけに、
「ケチ」をつけるのに苦しい思いをした。多くの部分が、自分の持
っていたイメージと齟齬しないからでもある。教えられた部分も、
もとより多い。ようやく、こういう「醒めた」しかも、全体的な書
が出現する時代になったという、歓迎の感慨を強く持つ。しかし、

そうは言っても、問題点をヒネリ出してみることは、研究というこ
との本質にかかわって、重要であろう。

以下、そういう気持から、自分の誤読・曲解を恐れつつも綴って
みたものである。なおここでは、細部のいちいちを問題とするので
はなく、理論構造にかかわる問題提起を中心としたい。また、時に
礼を失した言い方になっている部分もあるかも知れない。予めご寛
恕を願っておきたい。

まず、氏の定義する「宋学」は、理気心性の学全般を含んだ広い
意味であるが、この広い規定の範囲で考えるならば、次のような観
点も考慮が必要と思う。すなわち、徳川前期の儒教思想は、その移
入期から、明代儒教思想の諸潮流の影響を強く受けている。明代儒
教思想史の特徴は、朱子学の国教化による形骸化と、それへの懐
疑・反撥からする心学的新潮流が、外形的には諸伝統思想の混淆と
いう形を呈しながら渦巻いていたこと。そしてそれは、朱子が目指
し、前提としていたすべての、少なくとも部分的変更を前提として

いた、と言えよう。そのエートスが、新社会の創成期でもあった徳川前期に、深いところで適合する面があったのではないか。広い意味での「宋学」の概念中に属する、こういう側面からの検討が捨象されているのが残念である。(これにかかわることは、最後にもう少し具体的に触れるはずである。)

研究史的に言えば、氏は尾藤氏の所説に最も強く影響を受けていると思う。たとえば、氏の理論的枠組となっている、次の言葉などを参照されたい。

「少なくとも、徳川時代初期、概ね十七世紀の終り頃まで、朱子学・宋学が本来そうであった所の全人的な修養と教養の体系としても、その一面である、倫理と政治にかかわる教義・教説としても、また自然・社会・人間を包括する物の見方、考え方としても、当時の日本社会を広く被って、あるいはそれに深く浸透して、受容され普及していったなどと解することはできない」(七頁)

氏は、尾藤氏の仮説・推論を「封建」「土農工商」「華夷」「士」「家」「礼」など、宋学の前提する主要概念について詳細に裏づけたととも言えるかも知れない。

ところで、「朱子学・宋学」がそのままの形で、当時の日本を「広く被」ったり、「深く浸透」してはいなかったことは、少なくとも今日では常識になりつつあるのではなからうか。やや違った土俵にテーマをずらせる気味があるかも知れないが、研究史上の現在の問題点は、宋学が支配の側のイデオロギーとして、この時代にどのように受容され機能したのかという点にあるように、私は思う。そうだとすれば、この点について本書は殆んど論じていないし、受け取

りようによつては、問題関心さえ欠落させている、と言えるかも知れない。本書の副題は「徳川前期儒学史の「条件」」であり、この側面を意図的に捨象したとも言えようが、日本思想史を「何が故に研究するのか」にも響くポイントでもあるはずである。したがって、この問題にかかわる重要な別の「条件」を、ここでは少し詳しく述べておきたい。

寛永十八年(一六四一)、オランダ人を長崎出島に移して、秀吉以来の「鎖国」は完成する。「鎖国」は権力の経済統制とイデオロギー統制の二面を主要素としていた。この三代將軍家光の治世の後半期に、幕藩体制の身分的、制度的大枠が確立された。強い管理・統制がこの段階で、すでに思想にまで及んでいることを確認すれば、ここでは良い。

慶安四年(一六五二)、十一歳で四代將軍となった家綱の周辺では、朱子学色が濃厚となり、他方、浪人問題の激化など社会不安を煽るかに見えた宋学内での異端に対する警戒的雰囲気、権力の周辺に萌す。具体的に言えば、家綱即位直後の羅山からの『大学倭字解』の献呈、及び、十五歳時の『大学』首章の進講(『大学』の進講自体は、豊臣秀頼にさえ溯るが)であり、備前藩主で、將軍家に関係深い池田光政の蕃山登用に関わる、幕閣の注意・注視である。

特に重要なのは、家綱の後見を託された叔父の会津藩主保科正之の役割及び思想である。『徳川実記』に「退朝の後ただ枢密のめれむ事を恐れ、瑣事といへども、父子夫婦の間も其事に及ばざれば、侍臣も聞事を得ず。よて補導調和の美事伝はらず」(卷三十八)とあるように、神秘のベールに覆みがちではあるが、権力の最深奥部

にあつて、彼なりの朱子学的諸政策を断行させたことは明らかである。詳細を述べる場ではないので、二点に限って重要事項を挙げると、寛文三年（一六六三）の武家諸発度発布の際の「殉死の禁」の申し渡しのこと。及び、寛文六年（一六六六）の素行の赤穂配流、いわゆる「寛文異学の禁」にかかわる問題である。正之の政策は全体に統制的色彩が強く、特にイデオロギー統制を重視していたらしく、自藩内での「異色・異学の禁」、幕府の寺院統制とこれにかかわる日蓮宗不受不施派の追放との関連も注目される。寛文六、七年は、会津の他、徳川光圀の水戸藩、池田光政の備前藩でも淫祠・邪神の整理が强行されるが、いずれも、幕府権力の中核に近い藩主のもとでのことであるのが注目される。

闇斎が正之と直接接触したのは、寛文五年で、以後接触が深まる。承応元年（一六五二）四十歳で『小学』を読んで朱子学に帰入したという晩学の正之ではあったが、闇斎との出会いより十年以上まえに、既にかんりの研究をしてもいる。闇斎は民間にあつて正之のイデオロギーを普及する役割を果たしたという面もある。闇斎学が最も盛んとなるのは「寛文延宝の間」（河口静斎『斯文源流』）で、この頃、闇斎の朱子学原典の抜萃書や、『拘幽操』など独得の表章書が続々と、かつ大量に出版され、京都の家塾では、講義中心の大衆的な教育活動が勢力的に展開され、日本朱子学の一牙城となつてあつた。

以上、素描した事象は、氏が画期とされる天和期（一六八一〜八三）以前の朱子学にかかわる政治思想的側面、石田一良・今中寛司両氏などによって追求されてきた羅山など林家の役割・思想の

追求とともに、本書に補われなければならない重要な一側面であると思う。この観点からすれば、「寛文異学の禁」にかかわる素行・番山の研究や、平重道氏の『近世日本思想史研究』などを手がかりに、研究史上でも弱点となつてゐるこの分野を、政治思想史の研究である氏自身に更に明らかにしてほしいと思うのである。以下については、個別の問題を、個条書き的に四つに分けて述べたい。

一、寛永期からはじまる「仮名草子」に含まれる宋学的要素には、本書の観点にかかわつて、かなり重要な側面があるのではない。氏は、『可笑記』なども視野に入れているが、「仮名草子」の一部の宋学思想に基づく体制批判的要素、への考察を欠いてゐると思ふ。『可笑記』は、羅山の仮名書き教訓書（仮名草子）『愚言抄』『童観鈔』『三徳抄』『春鑑抄』などから、多くを引用してゐることが知られてゐるが、そこには、「国家治乱の本」は「主君の善悪」によるとする（大盗は侯たり）など、ような、原朱子学に旺盛な批判的精神が脈打つてゐる。氏も言うように「仮名草子が当時決して大衆的読物ではなかつた」（一三頁）ことも明らかであるが、整版印刷により、この種のものが飛躍的に発行部数、種類を伸ばし、「後掲」「再刻」を重ねたのは、当時の知識層たる武士の知的要求に応え、受容された面があるからであらう。「浮世草子」の時代になると、正面からの体制批判の要素を喪失させるが、そのことの儒学思想受容史への示唆も、汲み取るべきことであらう。

二、戦国武士像がやや一面的に描かれてゐないか。氏は、戦国「武刃」の殺伐さを「主君の命令の下に、傷害・殺人を犯すことが、その生と精神の焦点であつた。」（九頁）と強調する。そして、

彼らの主従関係について、「いわば生前から定められた運命共同体をなす」(七十九頁)とし、徳川前期の武士の心情もこの伝統を継承している、とする。しかし、戦国時代は凄まじい殺戮行為も多かったが、合理性や主体性を求める自律性の高い個人を多く産み出した時代でもあったろう。そこでの主従関係も、双務的・契約的だったとも言われる。他方、徳川期初期の情緒的・一体観を強調する『葉隠』などの武士道は、平和の時代になって倒錯的にそれが理想化された、という面も強かろう。家康が自己の行動の正当化の根拠として、『孟子』の放伐論に関心を持ったのに対し、四代家綱の時代の保科正之や水戸光圀が、朱子の「君臣義合」説を毛嫌いした(八七頁参照)のは、当時の武士の主従意識一般を反映しているというよりは、固定化された身分制度秩序の破壊に連がるのを恐れる、為政者・権力者の体制的意識の反映であろう。これに関連し、赤穂浪士の評価問題(八四頁)にも疑問があるが、以上の文脈でその論拠は賢察願えると思う。

三、「修己治人」の学と教化(育)思想の関連についても、氏のとらえ方はやや一面的と思う。氏は「その(朱子学の引用者)主体形成は、一応、凡そ人たるものの共通課題とされながら、實際上『士大夫』としてのそれである。すなわち、この意味でも、朱子学は民の教化のための教えではなく、むしろ『士大夫』の学なのである」(九六・九七頁)とする。本節の朱子学の担い手たる士大夫層の意識や役割の社会的分析は、他の部分同様に鮮やかで教えられる点も多く、朱子学の本質をよく言い当てているとさえ思う。

しかし、『大学章句』序の「三代の隆んなるや……王公より以下、

庶人の子弟に至るまで、皆小学に入る」や、『大学章句』の三綱領「新民」の伝の「康誥に曰く新にするの民を作すと」に対して、「之を鼓し之を舞す、之を作と謂う。其の自ら新にするの民を振起するを言うなり」とあるのや、『近思錄』教学の道篇に程伊川の「古者八歳にして小学に入り、十五にして大学に入る。その才の教う可きものを択んで之を聚め、不肖なるものは之を農畝に復えす。」云々、などの語があるのをみれば、庶民の教化(『大学章句』序には「教化陵夷、風俗頹敗」の語もある。)や、エリート選抜の一階梯としての庶民の「小学」への入学をも、朱子が理想としていたことは明らかである。我が国でも閻斎派三傑の一、三宅尚斎に培根達支堂という庶民教育の実践が行われるのも、この文脈で考えれば当然である。(尚斎『培根達支堂の記』参照)

したがって、朱子学はまず士大夫の「修己」の学ではあるのだが、それは「治人」「新民」を前提とし、その一環として庶民の教化・学校教育をも理想としており、しかも、民を単なる受動的被治者ともみていない(「自ら新にするの民」の語や、エリートの学校での選抜を理想としていることを想え)と、言うべきである。

なお、関連して「小学」と「大学」の本質的差異についても触れておきたい。氏の例示にもあるように、浅見綱齋の『靖献遺言』には、朱熹「小学」明倫「明君臣之義」「忠臣不事二君、烈女不仕二夫」の語があり、殊に表章されているが、この事に象徴されているように、「小学」は事柄を単純化、公式化して述べている面がある。原朱子学の本来は、放伐肯定であり、君臣義合論であり、教義の教化化には本質的に反対するものである。それにもかかわら

ず、『小学』の内容がこのような性格を帯びるのは、「この階梯では『灑掃應對』などの『事』を教え、『大学』に至って『此の事の理を發明す』る(『朱子語類』巻七など)」と言うように、『小学』の段階では、礼の実践とその基準の習得を、その「理」(由)の究明とは切り離して要求する、という理論構成になっているからである。保科正之が、『小学』を読んで朱子学に帰入したことは、前にも触れたが、土佐藩家老野中兼山も『小学』に強く惹かれた。彼らが魅力を感じた所以を、今論証はしにくい、恐らくこの書の教訓書としての簡便さ、教条化された内容や朱子のこの書の位置づけ方に、為政者の立場から便宜を感じとったからであろう。ついでに言えば、闇斎の朱子学は、本来の朱子学が有する普遍性、例えば、学(習)者の疑問の重視や格物致知の研究的態度を、『小学』的に解毒化した面が強い、と言えなからうか。藤樹を感動させた『大学』の理想主義に対し、『小学』の教条主義は、朱子の主観的意図の如何にかかわらず、為政者に「活用」された可能性がある。

四、氏の個別の論証・挙例には、戦後急速に進んだ関連分野の先行研究の成果が盛り込まれている。それらを十分に活用し一ツの構想の下に結び合せた、という側面が本書にはある。「にもかかわらず」あるいは「だからこそ」、近世日本思想史に関心を持つものにとつては、ユニークかつ便利な書である。文体も簡潔で小気味良い。しかし、今後期待したいことを更に二点のみ挙げると、一ツは、更に広い範囲の史料の活用による本書の仮説のより深い検証である。本書には、それと明示されていない場合にも、他の研究者が引用した書と同じ部分をそのまま使っているところもある。別に悪いことで

はないが、(自分も含めての反省ではもちろんあるが)窺知の資料の位置づけ方の枠内だけで論じている危険が有りはしないか。この時期のこととなれば、写本類を含めれば多数の無名の資料群が残存している。これらの活用による、一層の発展を期待したい。もう一ツは、藤原惺窩にはじまるとされる近世の宋学の受容期に、殆んど同時に並行して進行する、諸学混淆の流れの具体的解明である。例えば、本来の朱子学には存在しない、因果応報論や神君思想との関連の究明である。これらは、石田一良「前期幕藩体制のイデオロギ―と朱子学派の思想」(日本思想体系『藤原惺窩、林羅山』)などで初步的に追求されているが、この書の著者にとって、それらの側面をどう理論化してとらえるのか、興味がある。それに成功すれば本書に特徴的な社会史的要素が、更に格段と豊富になると思う。この点も、今後に期待したいところである。

以上は、「批判」的観点からする感想であるが、仁斎の思想史上の位置づけなど、教えられた部分は勿論多かった。

なお、寓目した著者の関連する近作を挙げておく。『近世日本政治思想』(日本放送出版協会、放送大学教材、一九八五)『御威光』と象徴―徳川政治体制の一側面(『思想』七四〇号、一九八六、二月)の二点である。

東大出版会 一九八五年一〇月

四六判 二五二頁

(宮城教育大学助教授)